



石巻

石巻あれこれ

～初めての勤務地で見たいもの
触れたもの～

横浜税関仙台塩釜税関支署石巻出張所長
鳥居 健

① はじめに

石巻市は宮城県の北東部に位置する、人口約14万3千人の宮城県第2位の街であり、リアス式海岸に囲まれた風光明媚な地域になります。(ん、その宮城県が分かりにくい…? →宮城県は東北最大の都市&東北唯一の政令指定都市である「仙台市」を有し、北に岩手県、南に福島県、西に秋田県・山形県と隣接した位置関係になります。)

② 石巻市の概要

東北最大の河川である「北上川」の河口に位置し、江戸時代には、東北各地で収穫されたお米等を、豊富な水運を利用して石巻に集荷し江戸へ運搬する「奥州最大のコメの集積港」として全国に知られていました。また、一年を通じて比較的温暖な気候であり、世界有数の漁場である金華山沖を有していることから、明治時代から漁業や水産加工の町として栄えてきた歴史もあります。一方、昭和39年には新産業都市の指定を受け、同42年に石巻港が開港し工業都市としても発展を遂げてきました。現在の石巻市は、平成17年4月1日に、旧石巻市・河北町・雄勝町・河南町・桃生町・北上町・牡鹿町の1市6町が合併し、新たな「石巻市」になったものです。

③ 税関官署と石巻港

仙台塩釜税関支署石巻出張所は、明治32年4月に「石巻税関監視署」として設置されたのが始まりで、昭和16年12月「塩釜税関支署石巻出張所」に昇格、同18年9月に一旦廃止されますが、同21年6月に再

開し、平成18年7月に名称変更され現在に至っています。また昭和49年4月から、現庁舎の所在地である石巻市中島町の石巻港湾合同庁舎(2階建)に入居、平成23年3月の東日本大震災で庁舎が被災し石巻法務合同庁舎への移転を余儀なくされますが、平成26年6月、同所に石巻港湾合同庁舎(4階建)が新築され再入居となりました。

輸出入の貿易額の比率については輸出1:輸入4となっており、輸入偏重であると言えます。取扱貨物については、輸出は紙類・同製品、金属鉱・鉄鋼くず(スクラップ)、魚介類・同調製品が上位の品目となっており、東日本大震災前に輸出額の5割以上を占めた「船舶」の輸出が復調しないのが気掛かりです。輸入は木・コルク製品、穀物・同調製品、石炭が上位の品目となっており、震災前年の貿易額を超える年もあるなど、堅調に推移しています。



・被災した庁舎と事務室



・現在の庁舎と事務室



石巻港は仙台市から約60Kmの距離にある旧北上川の河口西方に位置する「工業港」と、河口東方に位置する「新漁港」とからなります。ここでは工業港と

しての石巻港について記載しますが、昭和39年3月に石巻市が新産業都市に指定されたのと同時に重要港湾に指定されています。開港は昭和42年6月で、平成29年に開港50周年を迎えました。開港当初から紙業、飼料（肥料）、木材、鉄鋼、造船に関連する企業が進出し、50年以上経った現在でも産業の中心となっています。また、昨年（平成30年）には、総トン数10万トン・旅客数2,600名を超える大型客船が入港するなど、客船誘致にも力を入れており、新たな取組みにも積極的に動いています。



・庁舎から見た石巻港



・石巻港に入港した大型客船

4 まんが 萬画のまち石巻

少し話題を変えて、この地域で特色のあるものを紹介していきたいと思えます。石巻駅から南東に位置する中瀬に、仮面ライダーやサイボーグ009、ロボコン等の原作者として知られる石ノ森章太郎氏の「石ノ森萬画館」があり、駅前や商店街のあちこちにアニメキャラクターのオブジェが顔をみせています。

※石ノ森章太郎氏は石巻市のお隣の登米市のご出身ですが、少年時代にこの中瀬にあった映画館に、自転車で3時間をかけて通っていた思い出のある場所であり、産業衰退・人口減少で悩んでいた石巻のために、自らが「マンガを活かしたまちづくり」を提案し、平成13年7月に萬画館をオープンさせたとのことです。



・石ノ森萬画館



・石巻駅のアニメオブジェ

5 ひよりやま 日和山

石巻の代表的なシンボルに「日和山」があります。標高約60mで山頂からは太平洋を一望でき、中瀬には石ノ森萬画館の丸いドーム形の建物が目に飛び込ん

できます。日和山という山は全国に80カ所以上あるのだそうですが、「石巻の日和山はその代表的な日和山として知られています」と、石巻の方がおっしゃっていました。また、港や日北上川を一望できることから、東日本大震災の時には沢山の方が避難した山でもあります。そこから見た石巻の惨状をも知る、悲しい記憶の残る場所でもあります。



・日和山より太平洋を望む



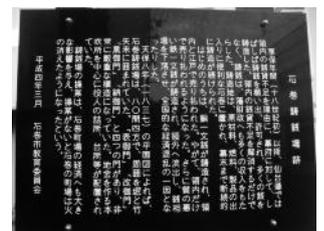
・日和山より中瀬を望む

6 いせんば 鑄銭場

石巻駅の東側に「鑄銭場」という地名の場所があり、赴任してすぐに周辺を探索したのを覚えています。石巻に鑄銭場が設けられたのは享保12年（1727年）のことで、江戸幕府が寛永36年（1636年）から江戸や近江国で鑄造を始めた「寛永通宝」という貨幣を作り始めた場所で、その敷地は80間（約150m）四方の広さがあったとのこと。今では小さな祠と碑がひっそりと残っているだけですが、石巻の歴史を物語るのに貴重なものとなっています。



・貨幣を鑄造していたことから「鑄銭場」と名付けられた



7 じざけ 地酒

宮城県には全国的にも有名な地酒が沢山あり、品評会でも数多くの金賞を受賞しています。一番名前が知っているのは「浦霞」でしょうか？ その他では「一ノ蔵」も有名ですかね。でも、読者の中には日本酒通の方もいらっしゃると思いますので、少しだけ紹介をさせていただきますと、「阿部堪^{あべかん}」「乾坤一^{けんこんいち}」「伯楽星^{はくらくせい}」「水鳥記^{みずとりき}」「綿谷^{わたや}」等、地元以外ではなかなか手に入ら

石巻

ない銘柄もあり、地の新鮮な海産物を肴に楽しんでおります。

※石巻が誇る地酒は「^{ひたかみ}日高見」と「^{すみのえ}墨廻江」の2種類になります。
（「ひたかみ」と濁る方がおりますが「ひたかみ」が正解です）



・石巻の地酒「墨廻江（右）」と「日高見（左）」

⑧ おわりに

取り留めのない話題でつらつらと書き進んで参りましたが、昨年7月に赴任してから、見たもの・触れたものについてご紹介をさせて頂きました。歴史についても興味があり、書き込もうかなあとも思いましたが、にわか仕込みの知識では少し荷が重かったことから、これからもっともっと勉強していきたいと思えます。また、東日本大震災についてもあまり詳しく触れておりませんが、復興が進んでいる地域とそうでない地域の差が見て取れるところがまだまだあります。読者の皆さんも足を運ぶ機会がございましたら、是非「石巻」にお越し頂き、ご自身の目で見て、歴史、文化、地酒等に触れて頂ければ幸いです。

【参考文献】

- ・宮城県ホームページ
- ・石巻市ホームページ
- ・石巻鑄銭場跡説明版（石巻市教育委員会）

博多

アジアの玄関口、博多港 急増する国際クルーズ船 への対応

門司税関博多税関支署次長
和田 芳郎

① はじめに

福岡県の西部に位置する福岡市、言わずと知れた福岡県の県庁所在地。

福岡市には税関支署が二つあり、博多税関支署と福岡空港税関支署という。

同じ市に二つの税関支署があるというのは全国でも珍しく、ごくごくおおざっぱに言って、博多税関支署が「海」を、福岡空港税関支署が「空」を管轄している。

(正確にいうと、博多税関支署の管轄は福岡市(福岡空港税関支署及び福岡外郵出張所を除く)、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、朝倉市、糸島市、那珂川市、粕屋郡(福岡外郵出張所を除く)及び朝倉郡の11市2郡)

沿革としては、明治16年(1883年)12月に博多長崎税関出張所が設置されたことに遡り、明治32年(1899年)4月に博多税関支署に改称、明治42年(1909年)11月に門司税関が長崎税関から独立している。

今回は博多税関支署がお送りする「各地の話題」というわけで、博多港についてご紹介申し上げることとしたい。

② アジアとの交易

個人的好みで恐縮ながら、小生、芝居好きなもので、博多と言って思い出されるのが「博多小女郎浪枕」という狂言。作者は、かの近松門左衛門。もともとは浄瑠璃で、当節なかなか上演されないが、ご当地、博多座の開場披露柿落大歌舞伎(平成11年(1999年)6月)で、亡き十二世團十郎が、廻り舞台いっぱいの元船の

舳先、豪快な「汐見の見得」をした海賊・毛剃九右衛門がなつかしい(上演時は「恋湊博多諷」の外題)。

毛剃一味の抜荷(密輸)を軸に、京都の商人小町屋惣七と、なじみの博多・奥田屋の遊女・小女郎が事件に巻き込まれていくといった筋立て(本筋ではないので、以下略)。

では、昔から博多港は交易が盛んだったのかといえば、まず思い出されるのは金印(「漢委奴国王」の刻印)。江戸末期に志賀島(といっても現在は島ではなく、海の中道と陸続きである)で発見された金印は、紀元一世紀に博多にあった「奴」の国の使節が後漢の光武帝に朝貢し、賜ったものと言われている(福岡市博物館に常時展示されている。実際見ると、一辺2.3cm、意外と小さい)。

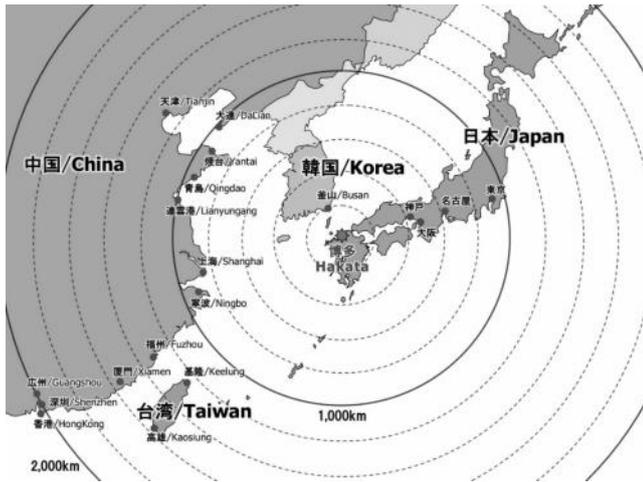
7~9世紀の遣隋使、遣唐使の時代は、博多が出発・帰着地となり、平安末期には日宋貿易が活発となると、日本初の人工港、「袖の湊」が造成された。その後も明・朝鮮との交易で、博多商人が台頭するも、江戸時代は鎖国政策。明治32年(1899年)には開港に指定され、国際貿易港としてスタートを切って、現在に至っている。

③ 国際クルーズ船

その博多港の位置を改めてご覧いただきたい。

図1の地図のとおり、一目瞭然。博多は釜山から約200km、大阪より近い。また、上海約900km、大連約1000kmは、東京とほぼ同じ距離である。

こうした地の利を生かして、平成2年(1990年)12月に釜山との間の定期フェリー(「かめりあ」、現在は「ニューかめりあ」で週7便、所要5時間半、旅客定員647人)が、同3年(1991年)3月に高速船



【図1】博多港位置関係図

ビートル（週14便～15便、所要3時間5分、旅客定員191人）が就航し、現在に至っている。

加えて、最近の博多港の話題と言えば、クルーズ船（なお、クルーズ船は国内各地を回るものと、外地との間のクルーズ船がある。税関が検査するものは後者であり、以下、区別するため、「国際クルーズ船」という）の入港で、平成26年（2014年）の国際クルーズ船の入港は100隻程度であったが、翌27年（2015年）には2倍を超え、平成28年（2016年）、29年（2017年）は2年連続で300隻を超える状況である。

旅客数については、国際クルーズ船に限って言えば84万人（税関調べ。二次港船の旅客を含む。以下同じ）を超え、定期船（ニューかめりあ及びビートル。以下同じ）も含めると100万人超の状況である。

博多港に寄港する国際クルーズ船の主な航路は、上海・天津・青島等の中国の港を出て、翌々日の朝（7～10時頃）に博多港に入港した後、国際クルーズ船が停泊している間に、旅客はバスツアーで近郊の観光地や買い物を楽しみ、同日夕方から夜にかけて博多港を出港して、中国に戻るというものが多い。バスツアーでめぐる主な観光地は、福岡市近郊の太宰府天満宮、福岡城址、大濠公園、櫛田神社、福岡タワー等で、買い物は天神等近郊の大型商業施設、免税店などである。

これほど短期間に国際クルーズ船の寄港が増えた理由については、国際クルーズ船により、また、同じ船でも時期、クラスに応じて料金はさまざまであるが、4～5日の旅程、スタンダードクラスの客室、船内での食事も含んで4000～5000元（約6.4万～8万円）と空路より安価であるうえ、船内に、カジノ、ゲームセ

ンター、シアター等の娯楽施設が充実しており、家族そろってのんびり船旅がすごせることが人気の要因と言われている。

また、地元・福岡市が国際クルーズ船の誘致に積極的であることが挙げられる。

設備面而言えば、国際クルーズ船の寄港が急増した平成27年（2015年）5月には、中央ふ頭クルーズセンターが供用され、CIQ（税関・出入国管理・検疫）審査や、旅客の待ち合わせ等に使われることにより利便性が向上している。年間300隻を超えるということは、1日にほぼ1隻、同日に2隻着岸することも多々ある。これまで1日に2隻が寄港する際は、1隻を中央ふ頭に、もう1隻は箱崎ふ頭に接岸させ、船内でCIQ検査を行っていたところ、CIQ検査に対応できる多目的施設が箱崎ふ頭に建設され、平成30年（2018年）11月から供用されている。さらに、急増するクルーズ船の寄港に対応すべく、平成30年（2018年）9月には、中央ふ頭を幅20メートル、長さ330メートルにわたって延伸し、定期船に加え、クルーズ船が2隻同時接岸できるように整備された（図2の写真は平成30年（2018年）9月4日、中央ふ頭に定期船ニューかめりあ及びクルーズ船2隻が同時接岸したときの模様）。福岡市によれば延伸部分についても、旅客のための施設整備を進めているところである。

また、中国・上海市との間で平成30年（2018年）1月に、連携強化のための覚書を締結しており、その第一弾として、これまではインバウンド、すなわち、中国からの旅客が主であったところ、博多から発着するクルーズ旅行を試験的に開始している。国際クルー



【図2】博多港中央ふ頭でのクルーズ船2隻接岸（右端は定期船ニューかめりあ）

ズ船で福岡と上海を往復するコースだけではなく、片道を飛行機の旅程として、短期間でも国際クルーズを体験できるものなど工夫を凝らすことにより、新たな旅客を掘り起こし、アウトバウンドの振興につなげたいとしている。

入国管理面でいえば、法務大臣が指定するクルーズ船の外国人乗客を対象として、簡易な手続で上陸を認める、船舶観光上陸許可が平成27年1月から導入されていることも国際クルーズ客の増加に寄与しているといわれている。

最近の博多港への国際クルーズ船の寄港はやや落ち着いてきており、平成30年（2018年）は265隻程度となる見通しである（平成30年12月3日現在）ものの、国際クルーズ船での入国旅客数は、上半期で前年比103.7%と増加しており、これはクルーズ船の大型化が寄与しているところが大きい。

実際、博多港に入るクルーズ船は、大きいもので総トン数17万トン弱、全長350メートル弱、乗客が5000人に、乗組員も1800名程度。まさに「動くマンション」とでも言いたくなるほど巨大なものである。



【図3】巨大クルーズ船

④ おわりに

我々、博多税関支署では最も多いときには、国際クルーズ船2隻に、定期船ニューかめりあ、高速船ビートルと4隻の船の旅客に対応している。政府が観光立国を国の成長戦略の柱の一つに掲げる中で、旅客の利便性に資するべく、迅速な通関が求められる一方で、本年（2019年）のG20（金融・世界経済に関する首脳会合）サミット（うち、財務大臣・中央銀行総裁会

議が福岡市で6月8日～9日に開催）やラグビーワールドカップ、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を控えており、テロに対する備えも含めた適正な対応も求められているところである。

訪日外国人旅行者や海上貨物が増加している中、円滑な通関とテロ対策など厳格な取締りを両立のうえ、国民の安全・安心の確保という税関の使命を果たすべく、職員一丸となって取り組んでいる。